

2014年8月20日、にしすがも創造舎は10周年を迎えました。



にしすがも創造舎
NISHI-SUGAMO ARTS FACTORY

10th Anniversary



10周年 記念誌 特 別 号
special

今回の「N press」は10周年記念として特別号を発行します。にしすがも創造舎にゆかりのある方々に寄稿を依頼し、この10年の歩みを振り返りました。



ニシスプレス 特別号 にしすがも創造舎 10周年記念誌 10th Anniversary

| CONTENTS |

ご挨拶	p 3
蓮池奈緒子 (NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 理事長) / 堤 康彦 (NPO 法人芸術家と子どもたち 代表)	
校舎、その不思議な空間に集まって	p 4
栗原 章 (豊島区文化商工部 部長)	
蝶の羽ばたきが世界を変える	p 5
東澤 昭 (公益財団法人としま未来文化財団 事務局長)	
表現者からみた〈にしすがも創造舎〉の魅力	p 6-7
倉迫康史 (演出家) / 種市一寛 (アートディレクター) / 中野成樹 (演出家) / カブ (美術家)	
地域のまなざし	p 8
中村丈一 (西巣鴨四丁目親交町会 会長) / 加瀬正二 (庚申塚商栄会 元会長) / 長洲晴美 (グローバルキッズ西巣鴨園 園長)	
2014 年の〈にしすがも創造舎〉から	p 9
米原晶子 (にしすがも創造舎 チーフマネージャー)	
にしすがも創造舎のあゆみ	p 10-11
年表 / プロジェクト	



にしすがも創造舎 | NISHI-SUGAMO ARTS FACTORY

閉校になった旧豊島区立朝日中学校を舞台に、アーティスト・地域の方々・子どもたちが様々なものを創り出す「アートファクトリー」。教室や体育館を舞台芸術の稽古場として運営するほか、校庭や校舎、体育館で様々なアートプロジェクトを実施しています。

運営団体：NPO 法人アートネットワーク・ジャパン NPO 法人芸術家と子どもたち 豊島区文化芸術創造支援事業

ご挨拶

本年8月20日にしすがも創造舎は、おかげさまで10周年を迎えることができました。

この10年間、都内での廃校活用の成功事例は数多く、全国的にも多くの廃校が新たな活動の拠点として再生しています。2001年に廃校リサーチを開始し、2002年から豊島区内での試験的活用を経て、2004年にしすがも創造舎をオープンした私たちにとっても、その事実は励みであり喜びでした。多世代が集いプロジェクトに参加し、地域とつながることができる「学校」という空間と空気。私たちはここで多くの課題を解決しながら活動を続け、にしすがも創造舎がふたたび「学びの場」となりました。

2016年夏、にしすがも創造舎は一旦閉じ、ここは「中学校」に戻ります。残された2年間、どのような活動をしていくべきか、これからじっくり考えていきます。中学生がここにまた新たな命を与えてくれることでしょうか。その間私たちは別な「学校」に活動の拠点を移します。将来、またここに戻ることができたなら...そんな夢も見えています。

最後に、この10年間にしすがも創造舎を支え、ともに歩んできて下さったすべての方々に深い感謝の気持ちを捧げたいと思います。そしてこれからも、どうぞよろしく願いいたします。

————— NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 理事長 蓮池奈緒子

10年前、旧朝日中学校（現にしすがも創造舎）に引っ越してきたときのことが昨日のこのように思い出されます。子どものために事業を展開する団体にとって、かつての学び舎、閉校になった学校を活動拠点とすることは理想的なことでした。学校の廊下を歩いていると、多感な中学生たちの息遣いがまだ聞こえてくるようでした。そして、しばらくすると、学校は卒業生たちだけではなく、近隣の人たちにとっても大事な場所であり、たとえ閉校になってもいまも生き続けているところなのだ、ということがわかってきました。

アートを通じて、子どもや親、おとなたちが互いに豊かな時間をここで過ごせたら、そしてここを拠点にいろんな境遇にいる子どもたちのところに会いに行けたら、と思い、これまで活動を続けてきています。アートのひとつの特徴は、多様性を保障し、共感し合い、分かち合う場を提供することです。元来、学校教育も似たような側面を持っているはずです。

ここ、にしすがも創造舎では、様々な子どもやおとなたち、そして芸術家たちが出会い、日々、なにかを創造しています。私たちは、あと2年で、一旦ここを離れますが、それまでの間、子どもたちや地域の皆さまと一緒に、さらにいっそう、新たな価値を創造していきたいと思っています。

————— NPO 法人芸術家と子どもたち 代表 堤 康彦

校舎、その不思議な空間に集まって

豊島区文化商工部 部長

栗原 章

にしすがも創造舎。なかなかよい響きである。このネーミング、個人的にはかなり気に入っている。かつて大都映画の撮影所だったこの地に、NPO 法人のアートネットワーク・ジャパンと芸術家と子どもたちがやって来て、旧朝日中学校を活用して区と協働事業を始めたのは 2004 年のこと。今でこそ豊島区はもとより、都内の文化行政に携わる者で知らぬ者がいないくらい(?) 有名になったが、開設当初は、地元の方々にとっては、何やら得体の知れない若者が集まる謎のファクトリーだったらしい。

そんな、にしすがも創造舎も、今年でちょうど 10 年になる。私は、2007 年から 3 年間、担当課長としていくつかの事業に係わったので、思い入れが強いプロジェクトだ。

数ある事業の中でも、私のいち押しは「子どもに見せたい舞台」シリーズである。特に、豊島区にゆかりの作家、江戸川乱歩を取り上げ、少年探偵団に扮する子役を区内の劇団から募集したり、ドリトル先生シリーズに出てくる空想の動物のデザインを、区内の小学生から募集するなど、まさしく、行政と NPO、地域が一体となった作品づくりではなかったか。また、芸術家と子どもたちには、保育園にアーティストを派遣して、子どもたちに楽しく芸術に触れる機会を作っていた。この事業は子どもだけではなく、保護者の方々や現場の職員にも好評であることを付記したい。

これまでの取り組みは、文化・芸術という、受け止め方が人それぞれで、客観的な評価が難しい分野における、行政と NPO との協働事業として、さらには、学校施設の跡地活用として、他自治体に誇れる先駆的なものだったと自負している。

今回、私に与えられたテーマは、にしすがも創造舎の 10 年間の成果について寄稿せよ、というもの。ひと言でいえば、区民にとって文化・芸術がより身近になったこと、そして区と NPO が楽しみながら、お互いに成長できたことだと思う。

2016 年、にしすがも創造舎は、中学校建替えの仮校舎になるため、いったん閉館になる。椎名町駅近くの我が母校、旧真和中学校跡地にて、第二章が始まる訳だが、彼の地は、かつてはアトリエ村やトキワ荘があり、多くの芸術家が情熱の炎を燃やした処である。さて、どんな活動を見せてくれるのか、まずはお手並み拝見。もちろん、区も可能な限り、コラボレーションしたいと考えている。つまり、我々の協働作業は、まだ夢の途中なのである。

熱く、激しくそして温かく —— 今後を支える強き味方

2007-10 年 3 月まで、文化商工部文化観光課長としてにしすがも創造舎を所管。プロジェクトへの理解は深く現場主義。毎年「子どもに見せたい舞台」稽古場には差し入れを持って激励に駆けつけて下さった。2014 年 4 月より、現職。再びにしすがも創造舎に「囀」を入れる立場に。

子どもに見せたい舞台

子どもたちに舞台の素晴らしさを知ってもらいたい、劇場を身近に感じてほしいとの思いから始まった企画。アート夏まつりのメインプログラムとして公演。2009 年からは 0 歳児の入場も可能に。



『少年探偵団』(2008)
Photo: NAGATORO Mizuki



『ドリトル先生と動物たち』
(2009)
Photo: IIDA Kenki



開場前の様子
Photo: IIDA Kenki



ロビーの様子
Photo: IIDA Kenki

蝶の羽ばたきが世界を変える

公益財団法人としま未来文化財団 事務局長

東澤 昭

世界のどこにもない、唯一無二の場所。それが私にとってのにしすがも創造舎である、と言ったら言い過ぎでしょうか。もう何年も前から私は、かつて豊島区にあった池袋モンパルナスやトキワ荘のような、芸術を夢見る人々が集い、刺激し合いながら創造するための《場》づくりができないものかとあてもないままに考えていました。

そんな時、2003年9月のこと、当時区が募集していた協働事業提案に応募のあったのが、アートネットワーク・ジャパンの「閉校施設を活用した稽古場運営事業と創造発信のための芸術環境づくり」、そして芸術家と子どもたちの「子どもたちが気軽にアートに触れることのできるチルドレンズ・ミュージアム事業」の構想だったのです。

それから1年後のオープンまでの間、両NPOと私たち行政との協議の積み重ね、様々な出会いや幸運、何より地域の方々の理解があっただけで「にしすがも創造舎」はどうか船出することができたのです。その航路に自信などはなく、あったとしてもそれは「蝶の羽ばたき」のように実に頼りないものでした。それが確信に変わったのは、にしすがも創造舎が現在立地する場所に戦前の一時期存在した大都映画巣鴨撮影所を代表するスター、ハヤフサ・ヒデトの存在を通して、西巣鴨周辺の土地の記憶とそこに住む人々の時間のつながりを新たに探ろうとする、子どものいるまちかど vol.1『検証すがも愛 ハヤフサ・ヒデトをさがして』の成功でした。

2004年9月から始まった現代美術家・岩井成昭さんと子どもたちによるプロジェクトの集大成として翌年2月に開催された「にしすがも活動写真館」には、会場となった体育館に区内外から溢れんばかりの人々が集まり、熱気に満ちたものとなりました。

それから今日まで、文化ボランティア育成事業、アート夏まつり、Greeting Greens～グリグリ・プロジェクト～、子どもとつくる舞台、子どもに見せたい舞台など、この10年間に展開されたプロジェクトを数えれば切りがありませんが、それらはみな、この場所をこよなく愛する人々の小さな閃きとアイデアの連鎖によって生み出されたものでした。その何と楽しく興奮に満ちていたことか。文化政策に携わることの素晴らしさ、醍醐味を、これら協働プロジェクトを通して私たちは教えられたのでした。

バタフライ効果を言い表す「アマゾンを舞う蝶の羽ばたきが遠く離れたシカゴに大雨を降らせる」という言葉になぞらえて、こう言いたいと思います。にしすがもから世界へ、小さいけれど新しい一歩のために羽ばたこうと。それは世界を変えることができるでしょうか。

難しいけれど実現したい —— オープンの原動力

2003-07年3月まで、区民部に新設された文化デザイン課の初代課長。氏の熱意がにしすがも創造舎オープンの原動力になったことは間違いなく、ふたつのNPOを発掘したのも氏。その後総務課長を経て2009-12年3月まで、文化商工部長。在任中「文化政策推進プラン」策定。2012-14年3月まで、保健福祉部長を経て現職。

子どものいるまちかど

アサヒビール(株)と「芸術家と子どもたち」がアートの視点から子どもたちを中心とする地域への関心の掘り起こしや、新旧住民同士のつながりを誘発しながら、「都市におけるコミュニティの再生」「新たな地域価値の創造」を考えていく実験的共同アートプロジェクト。



『検証すがも愛 ハヤフサ・ヒデトをさがして』(2004)

子どもとつくる舞台

NECと「芸術家と子どもたち」がパートナーシップを結び、2003年からシリーズで取り組んできたプロジェクト。ワークショップを通じて、子どもたちがアーティストと一緒に本格的な舞台を創作、上演した。



『踊る！すがも地蔵通り！！』



表現者からみた〈にしすがも創造舎〉の魅力

演出家／シアターカンパニー Ort.d.d 主宰

倉迫康史

にしすがも創造舎なんて最初は小さな試みだったのだ。その試みの始まりから関わってきた者として、今があるのは感慨深い。

10年前、僕は30代前半の血気盛んな若手演出家で、にしすがも創造舎の歩みと僕自身の歩みはリンクしてきた。はじめは創作に集中できる環境作りがすべてだったが、やがて全国の演劇人をつなぐネットワークの拠点となり、地域への発信や住民との交流の拠点となり、今や世界に向けて演劇を発信する拠点となった。ハイアートとしての演劇もコミュニティアートとしての演劇もここにはある。

この10年間の歩みをひと言で言うのなら「開拓の10年」だった。それは少なからぬ影響力を持ち、演劇界の風景を大きく変えた。小さな試みがここまでの大きな成果を挙げたことは後進への励みとなるだろう。

しかし、開拓の道は平坦ではなかった。むしろここまで続いてきたのは驚嘆に値する。関係各位の(惜越ながら僕も含めて)ここを絶対に守るのだという使命感と粘り強い努力がそれを成し遂げた。ひとりのアーティストとして長くそれに携われたことは、本当に良い経験・糧となった。深く感謝したい。

次の世代がどんな使命感と努力によってどんな成果を上げるのか、期待している。

にしすがも創造舎の体育館で初の演劇上演を成功させた演出家。彼なくしてはこの無謀とも思えるプロジェクトの成功はなかった。「子どもに見せたい舞台」シリーズの演出を初回より連続7回手かけ、2,000名を超える動員を誇る人気シリーズに育て、未来の観客を創出したことは特筆に値する。その他「リーディング講座」では文化ボランティアの育成にも尽力。
レジデント・アーティスト (2004-10)、アソシエイト・アーティスト (2011-14)

アートディレクター／フラットルーム合同会社 代表

種市一寛

はじめてにしすがも創造舎に足を運んでから8年が経ち、これまで主に広告物のアートディレクション・デザインを任せて頂きましたが、現在、アートネットワーク・ジャパンとは、としまアート夏まつりでの体験ワークショップ、芸術家と子どもたちとは、学校などでのワークショップをご一緒し、アートディレクターという立場からデザインを軸に、広告制作以外のフィールドへアプローチをするといった機会を頂いております。

そこで感じた事は、デザインにも、「経験を作る事ができる力がある」という事でした。特別な体験を日常に、日常の中に非日常な経験を作る事がデザインにもできるのです。子どもが大人になってもきっと覚えていてくれる体験・経験を作る事ができるのです。

私が行うワークショップだけでなく、そんな経験・体験を生み出す様々なプログラムがにしすがも創造舎で日々行われています。特別を日常に。特別なことが日常になれば、それはとても素敵な毎日常がします。特別なことが遠い場所ではなくてすぐそばにあることを、にしすがも創造舎という場所が、地域の皆さんにも、そして私自身にも教えてくれました。これからも、人々の「経験」や「特別な日常」を作り続けるにしすがも創造舎でいてください。10周年おめでとうございます。

アートディレクターという立場から、幼児教育・ワークショップ・お祭り企画などを行う。にしすがも創造舎のロゴマークやカモのキャラクターほか、多くの広報デザインを手がける。企画の意図や実施後の目標を深く語り合う関係は、施設スタッフにとっても企画の本質を問い直す貴重な存在となっている。





演出家／中野成樹＋フランケンズ 主宰

中野成樹

① そこは日常と地続きで日常とは違う時間が流れている。砂浜から海へ入り、波にやられ水中へ頭を突っ込んだ感じ。呼吸が奪われ目も耳も一瞬にしていつもの感じではなくなってしまう。すぐそこに「やることだらけの日々」があるのだけれど、ほんの少しだけそれを忘れてしまう、忘れられる。忘れることは良いことなのか悪いことなのか。海からあがりバスタオルで身体をふきポーツとする。そのポーツとの時間は、日々へ帰還した安堵なのか、向こうへ行ききれなかった、はじきかえされたゆえの無力感なのか。あるいは、魂が向こうへいってしまい、そこにあるのはただのぬけがらなのか。にしすがも創造舎の校舎の入口に立つと、なんとなくそんなことを思う。

② 学校って結界なんだなあ。簡単に入れる気がするのだけれども、気づけばまったく入れなくなっていたり。どうして入れなくなってしまったのだろう。歳かな。それとも、そっちへの興味をなくしてしまったからなのかな。それでも思いきって入ってみよう。あれ、意外とどうってことないぞ？ むしろ何もないぞ。心配しかないぞ。何の心配だ？ 何でもないぞ。そう、私たちにもかつて「まだ何もない」時期があった。では私はいま何になったのだろう。何になっちゃったのだろう。にしすがも創造舎の教室の中にいると、どうしたってそんなことを思う。

③ そこはなんだか素敵な場所だ。

舞台作品では、誤意識（誤訳＋意識）なる独自の手法で、凝り固まりつつある過去の名作をいまに仕立て直す。2006、2007年の東京国際芸術祭では体育館でのリディング公演に参加。その他、校内放送を使ったラジオ番組の企画『劇場の三步手前』や、校舎全体を使った地元アトラクション『おぼけ教室』など、にしすがも創造舎ならではの企画を多く手がける。

美術家／深沢アート研究所緑化研究室 代表

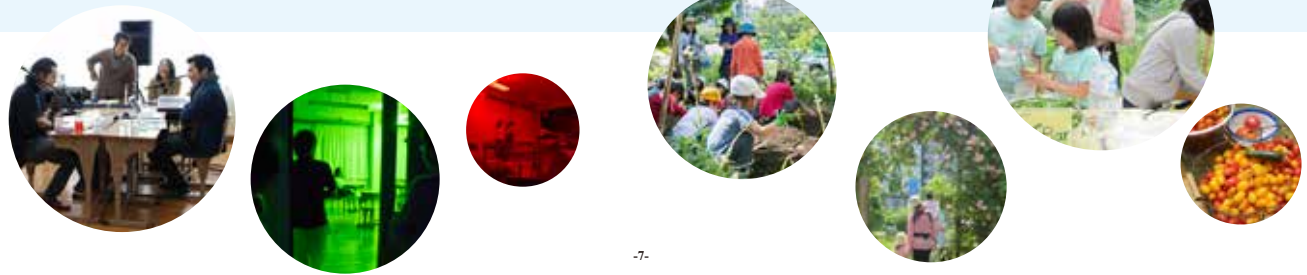
カブ

2006年にグリグリ・プロジェクトがスタートした当初より、ワークデー（活動日）やアートとグリーンを絡めたワークショップに携わった。ただの校庭で何も無いところから始まり、徐々に畑として素敵な緑になり、シーズン毎に色んな実りがあり、最近採れた野菜を販売できるまでになった。それもこれも、グリグリメンバーの意欲と体力によるもの！みんなが食べたい野菜はもちろん、石窯でターキーを焼きたい！ブドウを育てたい！ここにバラのアーチがあったら！とみんなの妄想は膨らんでいった。オーガナイザーがどうこう企画するというより、みんなの主体性で動いていく感じ。自分はそこにちょっとスパイスを加えるって感覚。とってもワクワクする作業だった。

メンバーの子どもたちは、年上のお兄さんたちの行動を見て自由に育つから独立心旺盛で、“子どもはたけ”のように大人がタッチできない場所を持ち、何かしら植えてみたりしている。そこには色んな子ども模様を見ることができる。

グリグリ・プロジェクトの風景は、こんな都会の白山通りに面した場所とは思えないほど、自然的にも人間の「ムラ」的にも豊かな、すべての生きものの共有できる「場」なのだ。

2006年度よりグリグリ・プロジェクトにおいてグリーン&ワークショップの企画・監修に携わる。メンバーのアイデアを畑づくりに活かしつつ、美術家という立場から廃校の校庭という場所ならではの景観としての畑づくりを提案。色や形の珍しい植物を紹介してくれたり、畑を彩る看板や植物のネームプレートなどのアイテムを、メンバー自ら創作する機会を多々創出してきた。メンバーとの絶妙なキャッチボールが、グリグリの畑を創り上げてきたと言えることができる。



地域のまなざし

地域の皆さんの深い理解と温かな見守りがあったからこそこの10年でした。特別号の発行にあたり、ゆかりのあるお三方に話を伺いました。

区から、NPOが来て何か活動をするというけれど、はじめは正直よくわからなかったよ。あなたたちが来てくれてまず、校舎にあかりが灯り、人の声がするようになった、それが一番よかったし安堵した。地域の安心、安全がなによりだから。とにかく皆さんマナーがいい。1年中、いつでも外の掃除をやってくれている。大変なことだ。いくら仕事といってもそうそうできることじゃない。

みなさんが町会の会合やりに顔を出してくれて、信頼関係ができてきた。地域が、無関心ではない、見守っている、そのくらいの距離感がいいのではないのかな。私も何回か舞台を拝見したけれど、体育館を劇場にした時は本格的にやっているなあと感じたよ。大変だったでしょう。地域の人々はここで日常を送っているのだから日々いろいろなことを見て感じていますよ。

にしすがも創造舎は高野区長の文化政策推進とともに歩んできたところだと思っている。(ここを離れることは)さびしいことだね…。できれば追いかけていきたい気持ちですよ、これ本当に本当。帰ってくる時はみなさんを大歓迎しますよ。あと2年は今のまま続けてくれればそれでいい。独自性が大切だし、いい意味で互いに線を引いてきたことが10年うまくやってこられた秘訣だね。

西巢鴨四丁目親交町会 会長 中村 丈一

商店街活性化推進活動がひと段落し、次どのように活動するか考えていた頃、商店街に「黒板」を押しながら若い女の子が歩くのを見て(※)まず興味を持ち、話を聞くとアートプロジェクトの一環として近所の絵を集めのぼり旗を作りたいとのこと。これは面白い。従来の商店街活動と違い画期的なことと思ひ、にしすがも創造舎とのおつきあいが始まりました。あの時出会ったアーティストの行動が、その後の商店街活動の考え方を変えました。集めた絵ののぼり旗を商店街に飾り、子どもたちの親御さんには好評でしたが、商店街には意外と不評でした。でも、反対の中からまた素晴らしいアイデアが生まれてくると思っています。

にしすがも創造舎は、アートを通して、昔ガキ大将が教えてくれた人と人との関係性に近づこうとしていたのかなと思う。どんな花が咲くのか楽しみな場所で、公私ともにいい刺激をもらった。

庚申塚商栄会 元会長 加瀬 正二

※アサヒビール株式会社と芸術家と子どもたちによる実験的共同プロジェクト「子どものいるまちかどシリーズ vol.2 りさ部」で行った「黒板たんず」というワークショップ。アーティストはさとうりさ(美術家) 2005年4月～8月

グローバルキッズは、各地域によって特徴のある保育をしています。開園(2011年4月)する前に周辺施設をリサーチして知り、開園後ご挨拶に来て下さったので身近になりました。現在、毎朝全園児がお散歩の前後に、にしすがも創造舎の校庭に寄って、時にはかけっこ、ボール遊び、0歳児はシートを敷いてひなたぼっこをしています。また秋には校庭をお借りして運動会も行います。

開園した当初、地域の方々が家では使わなくなったお雛様や兜飾り、クリスマスツリーなどをたくさん持ってきてくれて、地域の温かさを感じましたね。一気に園がにぎやかになりました。今後も、もっと地域の方々とふれあうような機会が作れればと考えています。あと2年のうちになにか少しでも一緒にできることがあればいいですね。卒園児がにしすがも創造舎に集まって同窓会をするとか。楽しみです。

グローバルキッズ西巢鴨園 園長 長洲 晴美



2014年の〈にしすがも創造舎〉から

2012年からチーフマネージャーを任された私が目指したのは、にしすがも創造舎をこれまで以上に活発なファクトリーにすることです。学び舎の歴史を感じさせる「創造舎」の英訳が、「Arts Factory (アートファクトリー)」。アートセンター、スクール、スタジオ…よく耳にするどの言葉とも違う名前でも、この場所は歩を進めてきました。では、ファクトリーとはどのような場所でしょうか？ なにかを生み出すために、成功と失敗を繰り返しながら技術を磨く場だと私は思います。完成した作品を紹介するためにシアター（劇場）やミュージアム（美術館）があるとなれば、ファクトリーは作品を生み出すまでの試行錯誤を支える場です。その役割を、にしすがも創造舎が担いたいと考えました。

オープン時から続く稽古場事業では、現在は中間発表やオーディションの開催も支援対象としています。また作品を創る以前の思考を語るアーティストトークの配信も始めました。活用されていなかった小さな部屋を、一年間アニメーション作品の原画制作の場として提供したこともあります。試行錯誤の末に成果がみえてきたら、それを公開し社会や地域に還元することもまたファクトリーの役割でしょう。にしすがも創造舎では積極的に創作過程の公開や参加型のプログラムを展開しています。

失敗を恐れずに挑戦し続ける場だということ、それは私たちがバトンを受け取った学校とも通ずるものがあるかもしれません。この場所から巣立っていく表現や作品が、人々の心や未来を動かす日がくると信じて、創造のための更なる挑戦を続けていきます。

————— にしすがも創造舎 チーフマネージャー 米原晶子

にしすがも創造舎のあゆみ

にしすがも創造舎は2001年にアートネットワーク・ジャパン（ANJ）が開始した廃校プロジェクトを経て、2004年8月「創造・発信・交流の場」を掲げオープンしました。オープンに至る経緯とこれまでの活動を、プロジェクトの開始年および豊島区の文化施策とともにまとめました。この10年でアーティスト、スタッフ、子どもたち、地域の方々「だれでも」がものを創り出せるアートファクトリーとなりました。これからも粋にとらわれることなく自由に伸びていく場所であり続けます。

年表	にしすがも創造舎のあゆみ	関連する豊島区の文化施策
2001 (H13)	創造の拠点を — 廃校プロジェクト 開始	
2002 (H14)	廃校の試験的利用開始 — 豊島区旧千川小学校	区制施行 70 周年 文化政策懇話会設置
2003 (H15)	新たな展開 — 稽古場利用 本格稼働 + 地域住民参加型イベント アート夏まつり@旧千川小学校 開催 ANJ と芸術家と子どもたちが、豊島区協働事業提案募集に応募	基本構想策定「伝統・文化と新たな息吹が融合する文化の風薫るまち」を基本方針に掲げる
2004 (H16)	創造・発信・交流の場 レジデントアーティスト活動 開始/子どものいるまちかど — にしすがも創造舎 オープン (8月20日) — 稽古場利用 開始	文化政策懇話会「豊島区の文化政策に関する提言」 提案をもとに、文化芸術創造支援事業の推進・実施 = にしすがも創造舎の開設へ 地域再生計画「文化芸術創造都市の形成」計画が内閣総理大臣認定（「補助金で整備された公立学校の廃校校舎等の転用の弾力化」）
2005 (H17)	体育館が劇場に、そして多くのプロジェクト誕生 演劇上演プロジェクト/子どもとつくる舞台/子ども夏まつり/リーディング講座・リーディングフェスティバル Greeting Greens ～グリグリ・プロジェクト～/子どもと向き合う大人のためのワークショップ — 体育館特設劇場 オープン	地域再生法に基づく地域再生計画として「としまアートキャンパス計画」認定（「地域再生に資するNPO等の活動支援」「文化芸術による創造のまち支援事業の活用」） 文化創造都市宣言
2006 (H18)	深く学び、楽しく遊ぶ場の提供 親子のための「ギロンと探偵のいる2年1組」/読んで遊んでえほんの会/親子で楽しむぶちライブ！ — 舞台芸術アーカイブ オープン	文化芸術振興条例施行 地域再生計画追加認定（「日本政策投資銀行による低利融資等」）
2007 (H19)	さらなる交流の場の創出 アート夏まつり/子どもに見せたい舞台 — 撮影利用 開始	
2008 (H20)	昇降口が新たなふれあいの場に — Camo-Café (カモ・カフェ) オープン	
2009 (H21)	校庭も遊び場に — カモフォリーと木道を製作 — グリグリ・プロジェクトの畑に石釜を設置	文化庁長官表彰〈文化芸術創造都市部門〉受賞
2010 (H22)	気軽にアーティストや作品と出会う場づくり エントランスプロジェクト	文化政策推進プラン策定
2011 (H23)	振り返り、そして先へ — ドキュメント『にしすがも創造舎 2004-2011』発行 — 校庭開放 開始	
2012 (H24)	創作過程を公開する試み ファクトリートーク/オープンファクトリー	区制施行 80 周年
2013 (H25)	より地域に根ざした情報発信 — ニシスプレス (N press) 発刊 — 稽古場短期利用 開始 — 体育館耐震工事	文化創造都市推進シンポジウム 「これからの文化創造都市としまのデザイン」
2014 (H26)	10 周年	

プロジェクト



子どものいるまちかど
2004-2008



Photo: KUBOTA Syuji

演劇上演プロジェクト
2005-2007



Photo: KATAOKA Yohta

子どもとつくる舞台
2005-2008



リーディング講座・リーディングフェスティバル
2005-2011 /以降区内で展開



Greeting Greens ～グリグリ・プロジェクト～
2005-



子どもと向き合う大人のためのワークショップ
2005-2008



親子のための「ギロンと探偵のいる2年1組」
2006-



舞台芸術アーカイブ
2006-



アート夏まつり
2007-



Photo: HIDA Kenji

子どもに見せたい舞台
2007-2011 /以降区内で展開



Camo-Café カモ・カフェ
2008-



エントランスプロジェクト
2010-



ファクトリートーク
2012-



オープンファクトリー
2012-

東京国際芸術祭 (TIF)
2005-2008



Photo: HASUNUMA Masahiro

フェスティバル/トーキョー (F/T)
2009-



Photo: KATAOKA Yohta

体育館上演提携事業

2007.10/4-14 『ティンゲル・グリム』

演出: 串田和美 美術: 宇野亜喜良

主催: (株)アートン/まつもと市民芸術館

2008.10/10-19 『YAMANOTE ROME and JULIET』

構成・演出: 安田雅弘 主催: 山の手事情社

2011.6/24-7/30 『血の婚礼』

作: 清水邦夫 演出: 蛭川幸雄

主催・企画・製作: Bunkamura

ニシスプレス | N press

2013年よりイベントにあわせて不定期に発行している、にしすがも創造舎のニューズペーパー。

事業の報告と今後の告知など、日々の様子をお伝えしています。主に施設内と近隣地域で配布しています。



<http://sozosha.anj.or.jp/>



Twitter

@sozosha_info



Facebook

<http://www.facebook.com/NishisugamoArtsFactory>

